

上級日本語 1 聴解と書き方コースの実践報告

数野 恵理

1. はじめに

本稿は ICU 日本語教育課程（以下 JLP）の上級日本語 1 聴解と書き方コースに関する実践報告である。JLP では 2000 年のカリキュラム改編により、上級が 2 レベルに分かれ、上級日本語 1 は「読解」「書き方」「聴解」「話し方」という 4 技能が独立したコース、上級日本語 2 は「話し方・聴解」「読解・討論」「書き方・プレゼンテーション」という 2 技能が統合した 3 コースとなり、学生は各自のペースでそれぞれのコースを選択して履修してきた（中村・坪根 2003）。しかし、上級日本語 1 の 4 技能を異なる学期に履修することには問題点もあり、2009 年秋学期より、上級日本語 1 は「読解」と「話し方」、「聴解」と「書き方」をそれぞれ連携し、できる限り同じ学期に履修させるようになった。以下では、2 技能を同時に履修させることになった背景を説明し、次に筆者が 2009 年秋学期から 2010 年秋学期まで担当した 4 学期間の上級日本語 1 「聴解」「書き方」コースの実践報告をしたい。

2. 背景

上級日本語 1 の 4 技能が独立したコースであることには利点もあるが、弊害もあった。一つは各コースで出される課題が多く、複数のコースを同じ学期に履修する学生の負担が非常に大きくなるということである。もう一つは、「読解」「聴解」などによるインプットなしに話したり書いたりする場合、その時点での語彙力に頼ることになり、表現を豊かにするという点で限界があり、話す内容や書く内容も表面的なものになりかねないということである。この解決策として、受容の「読解」「聴解」と産出の「話し方」「書き方」を連携させることが提案された。

2000 年のカリキュラム改編以来、上級日本語 1 の 1 週間のスケジュールは表 1 のようになっている。2 技能の組み合わせは「読解」と「書き方」、「聴解」と「話し方」という可能性もあるが、JLP 以外の授業のスケジュールとの兼ね合いから、同じ曜日の「読解」と「話し方」、「聴解」と「書き方」を組み合わせることになった。なお、コースヘッドも以前は 4 人がそれぞれの技能を担当していたが、一人が「読解」と「話し方」、もう一人が「聴解」と「書き方」を担当することとなった。

表 1 上級日本語 1 の 1 週間のスケジュール（2000 年から現在）

時間	月	火	水	木	金
I		読解	聴解		聴解
II		読解	書き方	読解	書き方
III		話し方		話し方	

学生には、技能と内容を統合させることでより効果的な日本語学習ができるという説明をし、「読解」「話し方」の2コースと「聴解」「書き方」の2コースは同じ学期に履修するように強く勧めることとなり、2009年度からの実施に備え、前年から周知した。しかし、既に「聴解」や「読解」を履修した学生は「話し方」や「書き方」だけを履修することになる。また、それ以外の学生の場合も、強制力のあるものではないことから、各コースを別の学期に履修することがある。そのため、「聴解」と「書き方」をセットで履修せず、どちらか一方のみを履修する学生が毎学期数名いるのが現状である。このような学生への負担を最小限に抑えることを念頭に置きながら、2009年秋学期よりコースの連携が始まった。以下に、上級日本語1「聴解」、「書き方」の順で、コースの目的と目標、2010年秋学期のコース内容、4学期間での変更点、今後の課題について報告する。

3. 上級日本語1聴解

3-1. 上級日本語1聴解の目的と目標

上級日本語1聴解では「日本語で行われる大学の講義などで必要とされる『聴く』力を身に付ける。また、日本人大学生が一般教養として見聞きするようなものから情報を得る訓練をする」ことをコース目標として掲げている（中村・坪根 2004）。これに沿って、2009年度と2010年秋学期は、コースの目的とそのため目標を以下のように設定し、コースシラバスに記載した。

[目的]

日本語で行われる大学の授業に参加できるような聴解力をつける。また、聴解で得た情報を報告したり、自らの意見を表現したりする力をつける。

[目標]

1. 語彙力をつける。
2. ニュース、ドキュメンタリー、対談、講義、映画など、さまざまなジャンルのものを正確に理解できるようになる。
3. 聞いた内容を要約したり、自分の意見を述べたりできるようになる。
4. 話を聞きながらノートが取れるようになる。
5. 映像の助けがない場合でも内容理解ができるようになる。
6. 誰の日本語でも聞き取れるようになる。
7. 聞き取り能力を独学で伸ばすためのノウハウを身に付ける。

3-2. 上級日本語1聴解2010年秋学期の内容

先に記したように、本コースが終わった段階ではまとまった話を単語リストなどの補助教材なしに聞いて理解し、それについて報告したり意見を述べたりすることができるようになることを想定している。また、上級日本語1は4年本科生にとって卒業要件を満たす最後のレベルであるため、聴解力を伸ばしていくための独学のストラテジーを身に付けてコースを修了することも目標としている。そこで、学期末の3コマをドキュメンタリー番組の視聴と報告に充てた。学生に4つの番組選択肢の中から各自興味のある

もの一つを選ばせ、2回の授業で繰り返し見る機会を与えた。この活動では語彙リストなどの補助教材を与えず、学生には自力で内容を理解し、ノートを取ることを求めた。そして、3回目の授業を個別面談とし、ノートを見ずに番組の要約と考察を述べさせた。なお、本コースは話し方のクラスではないため、番組報告の評価には発音やアクセントなどは含まず、内容を重視した。番組の選択肢は、学期によって多少異なるが、2010年度秋学期は以下の4つである。26分の『クローズアップ現代』に比べ、48分の『プロフェッショナル仕事の流儀』は時間が長いが、プロフェッショナルを選ぶ学生が少ないということとはなかった。

- | |
|--|
| <p>①「電子書籍が『本』を変える」『クローズアップ現代』2010年10月18日放送
NHK</p> <p>②「広がるおいビジネス」『クローズアップ現代』2010年5月18日放送 NHK</p> <p>③「ペットは泣いている～激安競争の裏側で～」『クローズアップ現代』2009年8月5日放送 NHK</p> <p>④「漫画家 浦沢直樹の仕事」『プロフェッショナル仕事の流儀』2007年 NHK</p> |
|--|

この活動は、ノートを取るということ、聞き取ったことを報告し、自らの意見を表現するという、独学のストラテジーを身に付けるという目標は達成しているが、繰り返し聞くことができるという点で実際の大学の授業とは異なる。そこで、最終日は一つの番組を通して見るという教室活動をした。

この最終ゴールを達成するためには、異なる力が必要となる。当然、単語リストなしに一度で大意をとるという力は必須だ。しかし、これは日本に留学している学生であれば、日々の生活で行っていることだと考えた。そこで、本コースでは語彙力をつけ、話の詳細まで正確に理解する力を養うことにし、複数の活動を組み合わせた。以下に授業の進め方を3種類紹介する。

まず、NHKの『クローズアップ現代』や『プロフェッショナル仕事の流儀』などを扱う場合は一つの番組に2～3コマを使い、1コマ70分の授業を以下のように進めた。前の授業で意味付きの語彙リストを配布しておき、授業の冒頭で語彙と内容に関する小テストを行う。そのあと、全員で番組の一部（10～15分程度）を一度見て、その時点で聞き取れた内容を口頭で確認する。次に、各自のパソコンで音声のみを繰り返し聞いてワークシートの質問に答える。最後に、クラス全体で答えを確認すると同時に、ワークシートで問われていない部分の理解を確認する。以下でこの流れに関して詳しく説明する。

まず、語彙の導入だが、実生活では語彙リストをもらうことはできない。しかし、筆者が学生時代に第二言語（英語）で行われる専門科目の授業に参加した経験から考えると、一般的には授業の前に教科書や資料を読んでおくことが求められたので、授業で用いられる専門の語彙に親しんだ状態で授業に臨むことができた。そのため、本コースでもあらかじめ語彙に親しませておくために、事前に語彙リストを配布し、語彙の予習を課した。そして、授業冒頭の小テストでその日の語彙を問うた。小テストでは語彙だけでなく、内容に関するものも行った。これは前回の内容に関する文を教師が口頭で読み

上げ、学生に正誤判断をさせるというものである。

個別作業をする前にクラス全体で番組を見たのは、一度でどのぐらい聞き取れたかという、その時点での自分自身の実力を認識してもらうためである。一方、聴解を苦手としている学生にとっては、クラス全体での確認が理解の助けとなるという利点もあった。次に、CALL (Computer Assisted Language Learning) システムを用い、各自のパソコンで音声のみを繰り返し聞き、詳細について正確に聞き取ってワークシートに答えるという時間を設けた。最近のテレビ番組はかなりの部分に文字情報が含まれているため、映像を繰り返し見せると、目に頼って質問に答えることになってしまう。そこで、この段階では、音声のみを使用した。

本コースは「聴解で得た情報を報告したり、自らの意見を表現したりする力をつける」ことも目的の一つであるが、1コマ70分の限られた授業時間の中では内容理解が中心となり、その内容について報告をしたり、意見を述べたりするというところまで十分な時間を取るのには難しい。そのため、一つの番組が見終わった後は、宿題として番組の要約と考察(400字)あるいは要約(400字)を手書きで書くことを課した。

これは書き方コースとの連携の利点である。コースエバリュエーションに「もっと聞くことにフォーカスした宿題を増やしてほしい」というようなコメントを書く学生がいた学期もあるのでバランスは重要だが、学生も聴解と書き方が連携しているという意識を持っているため、大部分の学生には聴解コースの宿題として番組の要約などを書くことが受け入れられていた。なお、これを書き方コースではなく聴解のコースの課題としたのは、書き方コースを履修していない学生にすべての番組を視聴させるのは負担が大きすぎるためである。

内容理解で活動を終わらせず、それについて書くということは、語彙の習得にもつながる。実際に、「語彙クイズだけでなく、要約や考察を書くことが新出語彙の習得に役立った」とコースエバリュエーションに書く学生もいた。また、要約をしたり、自分の考えを述べたりする練習としても、この課題は役立った。

なお、これらの宿題は漢字力をつけるために、すべて手書きとした。JLPの中級までは漢字のクラスがあるが、上級日本語1では漢字を教える時間を設けておらず、書き漢字のクイズや試験もない。しかし、実際には漢字を苦手とする学生も多いので、漢字を書く機会を作ることは必須だと考えた。最近の傾向として、帰国生やインターナショナルスクール出身の学生のための日本語特別教育プログラム(スペシャルジャパニーズ)ではなく、中・上級の一般の日本語のプログラムにプレイスされて日本語を学ぶ継承語系の学生が増えており、2010年秋学期の上級日本語1聴解は継承語系の学生が半数を占めていた。このような継承語系の学生にとって、聴解クラスの内容理解は比較的やさしくなってしまうが、その他の学生のことを考えると継承語系の学生に合わせて聴解のレベルを上げるわけにはいかない。しかし、ワークシートや要約・考察を手で書くことにより、継承語系の学生も語彙の拡張や漢字の習得というように目的意識を持ってクラスに臨むことが可能となった。これも書き方コースとの連携の効果と言えよう。

以上が最も典型的な授業の流れであるが、聞き取れない言葉を語彙リストに頼らずに自分で調べる教室活動も必要なので、ニュース番組は語彙リストを用いない授業とした。

但し、政治など基礎知識がないとわからないような場合には、ニュースを聞く前に基礎知識の解説を兼ねて語彙の説明をした。その後の流れは先と同様だが、ワークシートは質問に答える形式ではなく、スクリプトの空欄を文レベルで補充して完成する形式とした。わからない言葉がある場合は自分で辞書を引いたりオンラインツールを利用したりして書き起こす、細部まで正確に聞き取るという練習である。使用したニュースはTBS『News-i』のウェブサイトに掲載されているものである。常時1週間分の動画ニュースが視聴でき、スクリプトもあるので、授業前日のニュースを扱う場合にも教材準備が容易だ。また、早くワークシートが終わった学生には、答え合わせの時間まで各自興味のあるニュースを視聴させることもできる。さらに、授業外で自習させるのにも便利である。

上述の2種類の授業の進め方ではどちらも授業時間の半分近くを個別作業に費やさなければならない。そのため、個別作業を自宅で済ませる予習形式の授業も行った。近年オンラインで視聴できる番組が増えてきているので、これを利用し、授業の前に番組を聞いてワークシートを埋めてこさせた。ノートを取る練習も必要であることから、質問に答える形式ではなく、ノートの空欄を埋めるようなワークシートを使用した。そして、授業ではより詳細な内容を確認する、番組の続きを視聴する、番組のテーマに関して話し合いをするようにした。

本コースの課題としては、授業の予習や復習とは別に独立したものも課した。『ICU web Campus』というウェブサイトで見られるインタビューの書き起こし、映画の一部書き起こし、ニュース番組の要約などである。書き起こしの宿題は語彙リストを与えず、知らない語は自分で推測して調べるといったものである。映画とニュース番組は学生にそれぞれ興味のあるもの、自分のレベルに合ったものを選択させた。実際、聴解力の高い学生は難易度の高いニュースを選ぶなどしていた。

以下は2010年秋学期に本コースで使用した素材を扱った順に並べたものである。

- ①「教員もスタッフも、学生の将来をいっしょに考えるのが ICU 下村康雄 学生サービス部 就職相談グループ長」『ICU web campus』
http://subsite.icu.ac.jp/prc/webcampus/career/emp_01.html
- ②「アツくなれる場として選んだアメフト部 横山 慎 教養学部4年」『ICU web campus』 http://subsite.icu.ac.jp/prc/webcampus/campus_life/club_04.html
- ③「レンタルラブ」『世にも奇妙な物語 2003年 春の特別編』
- ④「経済対策・財政難、課題山積の管政権」『News-i』2010年9月14日放送 TBS
http://news.tbs.co.jp/20100914/newseve/tbs_newseve4526217.html
- ⑤「仕事×子育て 新たな壁」『ワールドビジネスサテライト』2010年5月11日放送 テレビ東京
http://www.tv-tokyo.co.jp/wbs/highlight/img20100511_wb_o1.html
- ⑥「公園がうるさい?～急増する音のトラブル～」『クローズアップ現代』

2009年10月5日放送 NHK

- ⑦「農家 木村秋則の仕事」『プロフェッショナル 仕事の流儀』2007 NHK
- ⑧「『休暇分散化』議論開始」『News-i』2010年10月6日放送 TBS
http://news.tbs.co.jp/20101006/newseye/tbs_newseye4544114.html
- ⑨「第30回 よりよく生きることを求めて 日本人のものの考え方」『NHK 高校講座 現代社会』
http://www.nhk.or.jp/kokokoza/library/2010/radio/r2_syakai/archive/chapter030.html
- ⑩「食卓に迫る遺伝子組み換え作物」『クローズアップ現代』2008年11月27日放送 NHK
- ⑪「校長 荒瀬克己の仕事」『プロフェッショナル仕事の流儀』2008 NHK

教材は大学生が興味を持ちそうな内容、日本語を道具として使って新しい知識を得ることができるものを選ぶようにした。様々なテーマを扱ったが、無農薬有機栽培に関する「農家木村秋則の仕事」と遺伝子組み換え作物に関する「食卓に迫る遺伝子組み換え作物」という二つは関連を持たせ、異なる観点から物事を捉えられるようにした。

また、本コースでは「誰の日本語でも聞き取れるようになる」という目標を設定し、男性が発話している教材を多く取り入れ、性別にかかわらず聞き取りができる力を伸ばすよう工夫した。女性の発話は明瞭でわかりやすいが、男性の発話は聞き取るのが困難だという学生の声を度々耳にするからだ。JLPでも教師はほとんどが女性であり、普段教室で男性母語話者の日本語を耳にする機会がほとんどない。そのため、聴解のコースでは意識的に男性が発話している素材を選んだ。

さらに、「聞き取り能力を独学で伸ばすためのノウハウを身に付ける」という目標のために、オンラインで視聴できるサイトも教室活動やその他の課題として積極的に取り入れた。そして、「映像の助けがない場合でも内容理解ができるようになる」という目標も設定しているので、『NHK 高校講座 現代社会』のようなオンラインのラジオや『ICU web campus』のように文字情報のないものも取り入れるようにした。

3-3. 上級日本語 1 聴解 2009 年秋学期から 2010 年秋学期にかけての変更点

前節では最新のコース内容を報告したが、以下では4学期間の主な変更点について述べてみたい。

まず、テーマの選び方を変えた。それに伴い、使用教材も毎学期少しずつ変化した。前節で挙げた使用教材のうち、2009年秋学期から2010年秋学期までの4学期を通じて使用したものは、「レンタルラブ」、『ICU web Campus』上のインタビュー、「食卓に迫る遺伝子組み換え作物」、「農家 木村秋則の仕事」で、それ以外は入れ替えた。当初は語彙の定着を図るため、また一つのテーマをさまざまな視点から考えられるようにするため、学期を通して「食」というテーマを設定し、ニュースとドラマ以外は同じテーマを扱っていた。しかし、前節で述べたように、2010年秋学期は様々なテーマを扱った。テーマを縛らないほうが、より質のよい番組を集められるということが理由の一つにある。

様々なテーマを扱う場合、語彙の定着が困難になるという心配があったが、コースエバリュエーションのコメントでは、「さまざまな分野の語彙が身に付いてよかった」「異なるテーマで最近の情報が得られておもしろかった」というように肯定的に捉えている学生が多かった。いろいろ試してみたが、テーマを統一することと変えること、どちらにもメリット、デメリットがあり、どちらがより効果的なのかについては模索中である。

次に、授業での個別作業のやり方を変えた。2009年は全体で映像を見た後の個別作業でも、各自のパソコンで同じ映像が見られるようにしていた。しかし、この方法だと文字情報に頼ってしまうという懸念から、2010年は音声だけを聞いてワークシートの質問に答えるように改善した。

また、語彙の提示方法も変更した。最初はすべての教材を作りながら授業を進めていたこともあり、授業当日にその日のリストを配布していた。その後、前節で挙げたような理由から、あらかじめ語彙に親しんでおいたほうがよいと考え、語彙リストは前の授業で渡すようにした。その後も語彙の小テストは復習形式で前回の授業の語彙を出題していたが、予習形式のほうがよいという学生からの要望があり、2010年秋学期はそのように変更した。以前は語彙リストを目で追いながら番組を聞く学生が多かったが、2010年秋学期からは語彙を覚えた状態で授業に出席するようになったため、リストを見ずに番組を視聴するようになった。この方法に変えたことには意味があったと思われる。

内容の小テストも方法を少し変更した。2009年には番組の一部（3分程度）を聞かせてその詳細を問うていたが、授業時間が足りなくなるのでこの形式はやめた。2010年度は覚えている範囲で答えられるような番組の要点を質問する形に変更し、小テストのときには番組を聞かせる時間を設けなかった。

学期末の番組報告の方法も一部変更した。当初は学生が要約を述べたあとで、教師が番組内容に関する詳細を質問して学生に答えさせていた。しかし、要約で言っていないことを質問しようとする、学生によって質問の難易度が変わって評価が難しくなるので、最後の学期はこの質問をやめた。以上が主な変更・改善点である。

3-4. 上級日本語 1 聴解の今後の課題

今後の課題として、4点挙げる。まず、大学の授業に参加できるような聴解力をつけるという目的を掲げながらも、実際の大学の授業を聞くというような活動は取り入れることができていない。学内の先生に依頼してオープンキャンパスなどで行われているモデル授業をビデオ撮影させてもらって授業で見せたり、同じようなモデル授業を本コースで行ってもらったりすることができるが理想的だ。あるいは、最近始まったNHK『白熱教室 JAPAN』という番組では実際の大学の講義が放送されているので、こういった番組を利用する可能性も探してみたい。

ニュースに関しては、2010年秋学期は書き方コースと関連を持たせることができなかったが、一つは関連のあるニュースも扱うようにしたい。書き方のクラスで「～に達する」「～を上回る」「大幅に」など、数値や変化を表わす表現を学ぶ時間を設けているので、聴解コースでも調査結果など数値に関する表現を含むニュースを選んだ学期もある。2010年秋学期は最新ニュースの中に数値に関する表現を含んだ適切なものがなく、これ

を扱わなかったが、やはり多少古いニュースであっても一つは扱うようにしたい。

また、授業の進め方にも多様性を持たせたい。これまで『クローズアップ現代』や『プロフェッショナル仕事の流儀』などを扱う場合、学期の最終日以外は、番組全体を一度に通して見るということをせず、一回の授業では15分程度しか見なかった。また、語彙リストも毎回先に与えて予習させるという形にしていた。しかし、まず語彙リストなしに一度最初から最後まで通して視聴し、全体を把握するという練習をしてから、細部を聞き取るというような授業の進め方も取り入れていきたい。

最後に、オンラインで利用できる動画や音声は急速な広がりを見せている。これまでも教師同士の情報交換によって助けられてきたが、今後もアンテナを張って情報を共有していきたい。この他にも改善の余地はあるが、まずは以上の課題に取り組み、よりよいコースを目指していきたい。

4. 上級日本語 1 書き方

4-1. 上級日本語 1 書き方の目的と目標

上級日本語 1 書き方コースは「日本語で行われる大学の講義などで必要とされる『書く』力を身に付ける。特に、論文を書くための諸技能の習得を目指す。また、様々な種類の文章を、その違いを理解して書けるようにする」ことがコース目標となっていた(中村・坪根 2004)。しかし、10 週間の週 2 コマというコースで、履歴書や手紙など様々な種類の文章と論文を扱うことは時間的な制約から難しい。また、大学の授業で論文が必要になるのは卒業論文のときであり、それまでは主に、推敲を重ねながらレポートを書く力、制限時間内にコメントシートに記入したり、エッセイ・テストで論述をしたりする力が求められる。そのため、2009 年度から上級 1 では論文ではなくエッセイ(作文)やレポートを書き、論文は上級 2 で書くこととなった。そして、様々な書式の文書は中級までに扱うことになった。これを踏まえて、2009 年秋学期から 2010 年秋学期のコースシラバスには目的と目標を以下のように記した。

[目的] 日本語で行なわれる大学の授業に参加するための書く力を身につける。

[目標]

1. 大学に必要な改まったメールのやりとりができるようになる。
2. 大学の授業で課されるレポートが書けるようになる。
3. 大学の試験などで課されるエッセイが制限時間内に書けるようになる。
 - a. 適切な文体で正確な文章が書けるようになる。
 - b. 論理的な文章が書けるようになる。
 - c. 聞いたり読んだりしたものを様々な長さで要約できるようになる。
 - d. 資料を用い、適切に引用することができるようになる。
 - e. 図表・データの説明・分析ができるようになる。
 - f. 1500~2000 字の漢字が使えるようになる。

目標 f の「1500～2000 字の漢字が使えるようになる」というのは、何も見ずに書けるという意味ではない。常用漢字として使われるような一般的な漢字はレポートを書くときに適切に使用することができ、また、辞書を使ってもよい場合にしっかりと書くことができるという意味で用いた。

4-2. 上級日本語 1 書き方 2010 年秋学期の内容

本節では、2010 年秋学期のコース内容を報告する。初日の授業ではコース説明のあと、「だ・である体」を用いて「日本語と私」という作文を書かせた。初日に作文を書かせることはその時点での学生の実力と個々の問題を把握し、すぐに問題に対応するという上で役立つ。また、このテーマは学生が日本語とのかかわりを振り返るのにも、教師が学生のことを知るのにも都合がよかった。

二回目の授業からは参考文献を用いた論証型レポートの準備に入った。論証型レポート（3000 字）作成の流れは以下の通りである。レポートのモデルを提示し、説明をした後、次回のクラスまでにレポートのテーマとアウトラインの案を二つ考えて提出させる。個別指導でテーマとアウトラインのフィードバックをし、一つに決めて書き直させる。その後 2 週間程度で使用できそうな参考文献のリストを提出させる。この段階で適切な資料が集められないと判断した場合にはテーマを変更させた。そして、テーマとアウトラインを最初に提出してから 3 週間後に序論部分を書いて提出させた。ここまではレターグレードをつけず、また、わかりにくい表現や不適切な表現がある場合には教師が適切な表現に直した。レポートのキーワードとなるような表現が間違っていると、本論を書き始めたときに、非常にわかりづらい文章になってしまうからである。その後、学期半ばに初稿（2000 字）を提出させる。この段階からはレターグレードをつけ、言語面は書き直し記号でマークしてフィードバックを行い、主に内容に関して個別に口頭で指導をした。第 2 稿（3000 字）では最後まで書き、レジュメも作成してクラスで中間発表をさせた。そして、クラスメートと教師からのフィードバックを参考にし、また、最終稿を出す前のチェック項目を点検して書き直し、期末試験期間に最終稿を提出するという流れである。この間に、レポートの文体、資料の探し方、事実文・意見文・行動文の使い分け、要約の仕方、参考文献の書き方、引用の仕方、論拠の示し方、序論の書き方、本論の書き方、結びの書き方、表紙の書き方、数値を表す表現、原因の考察、名詞化、レジュメの書き方などを指導した。また、提出の前には自分で繰り返し読み直し、推敲することの重要性を強調した。

制限時間内にエッセーを書く練習としては授業初日の作文のほかに、作文テストを 2 度実施した。これらはすべて手書きで 800 字程度のもとし、辞書やメモを参照することはできないようにした。作文テスト 1 はその場で提示された図表を見て、そこから読み取れる調査結果について説明し、原因の考察を述べるというものである。作文テスト 1 の前には数値を表す表現、原因の考察の仕方を学び、練習をする時間を設けた。

作文テスト 2 では聴解のコースで視聴した NHK『クローズアップ現代』の「食卓に迫る遺伝子組み換え作物」に関して書かせた。その準備として、学期の前半に同じく聴解のコースで視聴した NHK『クローズアップ現代』の「公園がうるさい」の要約と考察を

書くという作文の宿題を出している。

この二つの作文は聴解コースとの連携として入れたものである。大学の授業ではブック・レポートが課されることが多い。また、授業で学んだ内容をまとめ、考察を書くというレポートもしばしば課される。さらに、授業の最後にコメントシートにその日の授業内容に関するコメントを書いたり、中間・期末試験では論述問題やエッセー・テストに答えたりすることもある。本や講義とは素材が異なるが、ビデオで視聴した番組の内容を要約し、考察を書くことができれば、上記の課題も達成できると考えたのである。

この要約における問題としては、話の要点からは外れる情報を書き込んで重要なことが述べられていない、要約の部分に自分の意見が混ざっているなどがあった。また、考察においては、番組で提示された意見を繰り返すだけでクリティカルシンキングができていない、独自性がないというような問題が見られた。しかし、聴解コースの宿題として繰り返し要約と考察を課しているので、実際に書き方コースで評価される前に練習する機会もあり、学期末の作文テストまでには改善されるケースが多い。

なお、聴解コースで視聴した内容について書き方のコースで書くという課題は2回に抑えた。第2節で述べたように、毎学期書き方コースのみを受講する学生がおり、聴解との連携を増やしすぎると彼らの負担が大きくなるためである。

書き方のみを履修する学生には次の方法で対応した。まず、希望者には、書き方の課題となる番組を視聴する時間のみ、聴解の授業に参加させた。しかし、同じ時間帯にほかの授業を取っている学生などは聴解の授業に参加できないので、彼らには授業以外の時間に番組を視聴させ、希望があれば聴解のクラスで使用したワークシートを添削する、個別指導をするなどして、内容理解において不利にならないようにした。

このほか、学期の初めには目標1に挙げた改まったメールの指導を行った。中級コースでもメールを書く練習を取り入れているが、JLPの中級を取らずに上級から始める学生がいることもあり、上級でも扱っている。欠席の連絡、問い合わせ、依頼などのメールを書くことができるように、メールを書くときに使う表現の紹介、不適切なメールを書き直す練習をした上で、後日実際に教師にメールを送るという宿題を取り入れている。丁寧体や敬語を使って書くものとして本コースで扱っているのはメールのみである。

4-3. 上級日本語1書き方 2009年秋学期から2010年秋学期にかけての変更点

指導内容はより効果的な方法を模索しながら、2009年秋学期から毎学期変更していった。特に、参考文献を用いたレポートは問題が多かったので、4学期の間に指導方法を変えていった。以下ではこのレポートに関して、問題点と変更点を述べる。

2009年秋、冬学期は、参考文献を用いたレポートを書く前に、聴解のコースで視聴したNHK『クローズアップ現代』「食卓に迫る遺伝子組み換え」のビデオ・レポート(2000字)を課していた。しかし、2学期間、ビデオ・レポートは内容や構成に関して大きな問題が見られなかった。それに対して、参考文献を用いたレポートにはさまざまな問題が見られ、こちらに時間を費やす必要があると判断した。そこで、2010年春学期から2000字のビデオ・レポートはやめ、800字の作文で番組の要約と考察を書くという形式に変更した。これにより、学期の初めから参考文献を用いたレポートを書くことに専念でき

るようになった。

2009年秋学期は調査レポート（2500字）を書かせ、初稿の次を最終稿としていたが、引用の仕方が不適切なものが残ってしまい、最終稿の前にもう一段階の指導を入れる必要性を感じた。また、論理的に書くことができていないもの、一貫性のないもの、意見を支える根拠を十分に示すことのできていないものが見受けられ、次の学期は論理的に文章を書くという練習を増やすことにした。

2009年冬学期は調査レポート（2500字）を論証型レポート（3000字）に変更し、最終稿の前に第2稿を書かせた。また、レポートの準備段階として、論拠を示して主張をする作文を課したり、データを使って論拠を示す練習を加えたりした。第2稿を入れたことにより、引用の仕方に関する問題は解決したが、内容・構成に関しては、やはり個人差が大きく、問題を抱える学生が複数いた。まず、原稿用紙2枚程度の作文であれば論理的に意見を述べることもできて、長い文章になったときに、論理展開がおかしくなる学生がいた。また、英語でも大学のレポートを書いたことがない、読んだこともほとんどない、高校でもレポートを書いてこなかったという大学1、2年の学生もいた。彼らに限られた時間の中でアカデミック・ライティングとはどのようなものかを理解させ、それと同時に資料を集めてレポートを完成させるということは非常に難しかった。そこで、先に述べたようにこの学期でビデオ・レポートを書かせるのをやめ、次の学期からは論証型レポートに時間をかけることにした。

これにより2010年春学期は学期を通して論証型レポートに力を注ぐことが可能になった。レポートの準備から実際に書き始めるまでの間に3週間程度の時間を取ることができるようになり、準備段階で個別に指導する時間が増え、以前より問題が減った。しかし、やはり論の展開やデータの使い方がおかしい、一貫性がないといった問題がある学生の場合には、その指導が中心となり、純粋な日本語の指導は思うようにできなかった。なお、この学期は全体像を見るために初稿の段階で最後まで（3000字）書かせたが、やはり短期間で長い文章を書くのは難しく、初稿で根本的な問題があった場合に第2稿で大きく書き直させるのは負担となった。

2010年秋学期は、以前のように初稿で2000字、第2稿は最後まで書くという方法に戻した。その他は春学期とほぼ同様にした。この学期はレポートの完成度が最も高くなったが、他の学期に比べ、よくできる学生が集まったという可能性もある。

4-4. 上級日本語1書き方の今後の課題

前節でも述べたように、時間の制約から個別指導は大部分が内容、構成の指導に終始し、純粋な日本語の指導になかなか時間が割けない。JLPはアカデミック・ジャパニーズの習得を目標に掲げているので、日本語だけでなく、大学で必要となる書き方を教えるのは当然だが、言語面に問題があり、指導が必要な学生もいる。特に、4年本科生で初級からJLPで学んできた学生のうち、成績が悪くDでパスしてきたような学生の場合、書く力が上級に達していないことがある。上級に達している学生であっても、より洗練された表現が使えるようになりたいという学生にとっては、言語面の指導が物足りないものと感じられるようだ。実際に、コースエバリュエーションでも、レポートを書く力

ではなく、文法や表現などの日本語を伸ばすための練習をもっとしたかったという意見があった。今後はごく短い文章であっても頻繁に書く作業を入れ、指導する必要があるだろう。

また、日本語で開講される大学の授業に参加できるようになるという上級日本語 1 の目標を達成させるためには、中級での下準備が欠かせない。上級日本語 1 書き方コースで学生が抱える問題を考えると、日本語力だけでなく、論理的、批判的思考などアカデミックな力を JLP 全体で養う必要がある。以前は英語圏の学生は書く力があると思われてきたが、最近は母語でも書く力が弱くなっているということを目にする。週 2 コマの本コースだけで書く力をつけるのは困難なので、今後中級から上級にスムーズに移行できるよう、連携を図っていくことが課題である。

最後に、書くためには書き言葉を使った文章を読ませることも非常に重要であるが、モデルとなる書き言葉の文章に触れる機会が少ない。よいモデルを準備して提示することが急務である。ただし、他の技能に比較して書き方のコースは要求される課題が多いので、これ以上学生の負担を増やさないための対策を練る必要もある。そのためには扱う文章のテーマを統一する必要があるだろう。また、「書き方」コースの単位数を変更する、あるいは「聴解」と「書き方」ではなく「読解」と「書き方」の組み合わせにするなど、根本的な見直しも必要かもしれない。

5. おわりに

以上、本稿では上級日本語 1 聴解、書き方コースを連携することになった背景、それぞれのコースの目的と目標、コース内容、4 学期間での変更点、今後の課題について述べてきた。聴解と書き方のコースを同じ学期に履修させることにより、聴解という受容を書き方という産出につなげることが可能となった。また、同じ講師が二つのコースのヘッドを務めることによって、各コースで大きな課題を出す時期を調整することもできるようになり、以前に比べ学生の負担を削減できた。このように、2 技能の連携は効果的であった。しかし、前節で述べたように、将来的には「読み方」と「書き方」を組み合わせるといった可能性も探り、上級日本語 1 のあり方を議論していきたい。また、帰国生のための特別日本語プログラムではなく、一般の日本語プログラムにプレイスされる継承語系の学生が増えている状況を考えると、二つのプログラムのあり方も見直す時期にきていると言えよう。

参考文献

中村一郎・坪根由香里(2004)「日本語教育報告 ―この 10 年― 上級日本語 Advanced Japanese 1-2」『ICU 日本語教育研究センター紀要 13』58-70